207
73
1

けふあんにのたまへれはさいはてまいらせん
まそかくいにあるへかちるなれるあへし、
きみをとゆてきこえけまいらへてかた
ゆかのまいらせて
ひ年ててきのてもよき様まれたかくかん
何を花のきてよろこひてあく人をかえん
あつましてよさ何の雨ちのかきつき
ありかしるもとはひるまはたには㒵の
ゑ、はな花のさかりにみまうりて藤氏のなこに

照の趣旨 何故各候

けふあんはかなかれはきいつれてよむしあん
まそくいかなかへくえ給ふなりあそふし、
ちき梅とあるてきこえわけまいらせへてよ遊
なかりしかはさうらへはなしてはやなをまいらせてさ
ひ字まて志のてよき結まいらせかくかん
はなを花乃志てよつきて歌人をかん
あつましよさはつあちのかきつる
あかしをもむといひなまはふれあはれの
志い花乃さかりにみせつりて藤氏のはてに

さる程にたちいでてよめのこたへんといひけるに
出とう殿をかたりに申けるは
むかしたとへ有けるにも海きはまれは
世中をおもしろくわきまへてなる女のあま
よなりて世中を思ひしく京にもかへりて
はるかなる山さとにすみけるをはしらく
なりあれともよろこびやう申けるに
うむしとて雲はの思物なきしを
世のうきことを何となりてふ

とかんといひ侍りける東三条の文也
むかしたとへをはなしにもあにしちかきに
くあまく明のふかくなる春の草花みなみ
かなつまさつりけり色あやまりや忘らきん
みこころのつむるまにひとへの人をもあひへ
利分り何く
　祇園の森の夢をとまて非みまし給めい
古今　いやうれみもかり海きうれ
とかんよみて毛のまうけさふらふたのきさ

あさよ

むかしことなる事なくてあまになれる人有けりかたちをやつしたれとものやゆかしかりけむ賀茂の祭見にいてたりけるをおとこうたよみてやる

世をうみのあまとし人を見るからに
めくはせよともたのまるゝかな

これは斎宮の物見給ひける車にかくきこえたりけれは見さしてかへり給にけりとなん

むかしおとこかくてはしぬへしといひやりたりけれは女

しら露はけなはけなゝむきえすとて
玉にぬく人もあらしを

といへりけれはいとなめしと思ひけれと心さしはいやまさりけり

昔おとこみこたちのせうえうし給所にまうてゝたつた河のほとりにて

ちはやふる神世もきかすたつた河

からくれなゐに水くゝるとは

むかしあてなるおとこありけりそのおとこの
もとなりける人を内記に有けるふちはらのとしゆき　敏行 母紀名虎女
といふ人よはひけりされとわかけれはふみも
をさをさしからすことはもいひしらすいはむや哥
はよまさりけれはかのあるしなる人
あんをかきてかゝせてやりけりめてまとひ
にけりさておとこのよめる

左　つれ〳〵のなかめにまさる涙河
そてのみひちてあふよしもなし

かへしれいのおとこ女にかはりて
あさみこそ袖はひつらめ涙河

左　身さへなかるときかはたのまん
といへりけれはおとこいといたうめてゝいまゝて
まきてふはこにいれてありとなんいふなる
おとこふみおこせたりえてのちの事なりけり
あめのふりぬへきになんみわつらひ侍る身さいはひ
あらはこのあめはふらしといへりけれは例

いはねたゝ雲につゝみて見えぬ風の浪
かゝらくに思ひたえなむとすらひつゝ見ん
左
ゆふかくる雨もふりそさけまつ
水まさるやなきのまゆは色もかはらなへ
てはるにぬまてくさをいきまよふらむ
むかしをとめの袖をとりみて
風吹けはよは浪こえていはまれや
ほつ夜半の月にけく時なき
とはすかつとくさたにいひゆくかをこそおひゆる

右
秋のはらふかきそのはなのあさくみたなは
水のうさはき日風も吹く程と
むかしたとへもちりの人やうまつ
みよふ風の里
左
花より色も人をあらになりにけり
左持
いつま弧さきにきえなん見て
むかしおとこのかしはにみやかふ女房かはかうれし
つねよりも雨中ふよひゆめみはるかみそよきさひつゝと

いへりけれはおとこ
おもひあまりいてにし魂のあるならん
夜ふかくみえはたまむすひせよ
昔おとこやむことなき女のもとに
なくなりにけるをとふらふやうにていひやりける
いにしへはありもやしけん今そしる
またみぬ人をこふるものとは
返し　拾撰
したひものしるしとするもとけなくに
かたるかことはこひすそあるへき
又返し　拾撰
こひしとはさらにもいはし下ひもの
とけんを人はそれとしらなん
むかしおとこねんころにいひちきりける女の
ことさまになりにけれは
すまのあまのしほやくけふり風をいたみ
おもはぬ方にたなひきにけり
なし
昔おとこやもめにてゐて

なかゝらぬいのちのほとにわするゝは
いかにみしかき心なるらむ

或本不可有之云々　是本清和云々不可止

むかし仁和のみかとせり河に行幸したまひ
ける時いまはさることにけなく思ひけれとも
もとつきにける事なれは大鷹のたかゝひ
にてさふらはせ給ひけるすりかりきぬの
たもとにかきつけゝる

後撰

おきなさひ人なとかめそかりころも
けふはかりとそたつもなくなる

おほやけの御けしきあしかりけりをのかよ
はひを思ひけれとわかゝらぬ人はきゝおひけ
りとや

むかしみちのくにて男女すみけり
をとこ宮こへいなむといふこの女いとかなしうて
むまのはなむけをたにせむとておきのゐて
宮こしまといふ所にてさけのませてよめる

古今

おきのゐてみをやくよりもかなしきは

小町

宮こしまへのわかれなりけり

むかしおとこすゝろにみちのくにまてまとひ
いにけり京に思ふ人にいひやる
浪間より見ゆるこしまのはまひさし
ひさしくなりぬきみにあひみて
なにこともみなよくなりにけりとなんいひ
やりける
むかしみかと住吉に行幸したまひけり
我見てもひさしくなりぬすみよしの
きしのひめ松いくよへぬらん

おほん神けきやうして
むつましと君はしら浪みつかきの
ひさしき世よりいはひそめてき
昔おとこひさしくをともせてわするゝ
心もなしまいりこんといへりけれは
玉かつらはふ木あまたになりぬれは
たえぬ心のうれしけもなし
むかし女のあたなるおとこのかたみとて
をきたる物ともを見て

古今
かたみこそ今はあたなれこれなくは
続古今
わするゝ時もあらましものを
昔おとこ女のまた世へすとおほえたるか人
の御もとにしのひてものきこえてのちほとへて
拾遺
近江なるつくまのまつりとくせなん
続古今
つれなき人のなへのかすみむ
むかしおとこ梅壺より雨にぬれて人のまか
りいつるを見て
うくひすの花をぬふてふかさもかな
ぬるめる人にきせてかへさん
返し
うくひすの花をぬふてふかさはいな
おもひをつけよほしてかへさむ
むかしおとこちきれることあやまれる人に
新古今
山しろのゐてのたま水てにむすひ
たのみしかひもなきよなりけり
といひやれといらへもせす
むかしおとこ深草にすみける女を

をやうやうあきかたにやおもひけんかゝる
うたをよみけり

古今

年をへてすみこし里をいてゝいなは
いとゝ深草野とやなりなん

女返し

古今

野とならはうつらとなりてなきをらん
かりにたにやは君はこさらん
とよめりけるにめてゝゆかむとおもふ心
なくなりにけり

むかしおとこいかなりける事を思ひける
をりにかよめる

おもふことゝいはてそたゝにやみぬへき
我とひとしき人しなけれは

むかしおとこわつらひて心ちしぬへく
おほえけれは

古今

つゐにゆくみちとはかねてきゝしかと
きのふけふとはおもはさりしを

業平朝臣　三品弾正尹阿保親王五男（平城天皇之子）　母伊登内親王　桓武第八皇女　母藤南子　従三位乙叡女

年月日任左近将監

承和十四年正月補蔵人　嘉祥二年正月七日従五位下　貞観四年正月七日従五位上
五年二月十日左兵衛権佐　六年三月八日右近少将　七年三月九日右馬権頭　十一年正月七日
正五位下　十五年正月七日従四位下　元慶元年正月十五日右近権中将　十一月廿一日従四位上
二年正月十一日相模権守　三年十月蔵人頭　四年正月十一日美濃権守　同廿八日卒

親王　平城第三　母正五位下菅良藤継女
承和九年十月薨　贈一品

行平卿　阿保親王一男

天長三年　仲平　行平　守平　業平　賜姓在原朝臣
承和七年正月蔵人　十二月辞退　廿日従五位下　十年二月侍従　十三年正月従五位上
任左兵衛佐　五月右近少将　仁寿三年正五下　斉衡二年正月四位　因幡守
四年兵部大輔　天安二年二月中務大輔　四月左馬頭　三年正月播磨守

貞観二年六月内匠頭　八月廿六日左京大夫　四年正月信乃守　同月従四上
五年二月大蔵大輔　六年正月十六日備前権守　三月八日兼左兵衛督　八年正月正四位下
十年五月[illegible]備中守　貞観十二年二月十三日参議　五十二　廿六日右兵衛督
十四年左衛門督（八月廿日按察使（?））　十五年従三位　大宰帥　元慶元年治部卿　十月十四日別当
六年正月中納言　六十五　八年正三位　民部卿　仁和元年按察　仁和三年四月十三日
致仕　寛平五年薨

紀有常

承和十二年正月十一日右兵衛大尉　嘉祥三年四月二日左近将監　四月蔵人　五月十七日
兼近江権大掾　仁寿元年七月廿六日左馬助　十一月甲子従五位下　二年二月廿八日
兼但馬介　三年正月十六日左兵衛佐　四年正月十六日兼讃岐介　遷左兵衛佐（?）　斉衡二年
正月従五位上　同月十六日左少将　天安元年九月廿七日少納言（?）　二年二月廿日兼肥後権守
貞観七年三月九日任刑部権大輔　九年二月十一日任下野権守　十五年正月七日正五下
十七年二月十七日任雅楽頭　十八年正月七日従四位下　十九年正月廿三日卒　年六十三

二條后　中納言左衛門督　贈太政大臣長良女　母紀伊守総継女

貞観元年十一月廿日従五位下　五節舞姫　貞観八年十二月　入内　宣旨　九年正月
八日正五位下　貞観十年十二月十六日生第一皇子　廿七　帝此年　九　十一年二月立為皇太子
十三年正月八日従三位　元慶元年正月三日即位日立為中宮　卅六　六年正月七日為皇太后
寛平八年九月廿二日停后位　延喜十年十二月薨　六十九　天慶六年追復后位

河原左大臣　嵯峨第十二源氏

承和五年十一月廿七日正四位下　元服　六年閏正月己酉侍従　八年正月相摸守
九年九月己亥近江守　十五年二月右近中将　元美作守　嘉祥三年二月廿日従三位
五月右衛門督　仁寿四年八月兼伊勢守　斉衡三年九月但参議　右兵衛督伊勢守
如元

おもへなく
万葉集第十八
おもきすこよおきされ燈を
ほくよまおもへりのかけをよむ
月秋也　みすへ也

六帖哥
いつもえまきくかへさきえ竹の
よこおやされたさか人もなし

宋玉神女賦
素質幹之醲實兮志解泰而體閑

曹子建洛神賦
瓌姿艶逸　儀靜體閑
みやひ　みやひの也とふ詞
其ふみやひとかとすかとふい
またきとふ同仙なりしも

天福二年正月廿日己未中刻凌桑門之
盲目連日風雪之中遂此書寫了授
鍾愛之孫女也
同廿二日授了

此物語先年為或人染悪筆之處
及落行書損数ケ所故蔵置箱底乎
今度覓出之徼覚悟所辞勘物不凌
老眼書加令譲与畢堅不可出閫藏

永禄壬戌暦仲冬上澣

江南漁叟 七十五歳 (花押)